

2019年5月号 簿記論 つぶ問

3 問目

【問題】

1. 次の独立した各ケースにおいて、キャッシュ・フロー計算書（間接法）の「売上債権の増減額」として記載される金額を答えなさい。なお、マイナス調整の場合は金額の頭に△を付すこと。
 - ① 売上債権が前期と比較して 5,000 千円増加し、貸倒引当金（売上債権に対するもの）が前期と比較して 1,000 千円増加した。
 - ② 売上債権が前期と比較して 5,000 千円増加し、貸倒引当金（売上債権に対するもの）が前期と比較して 1,000 千円増加した（それぞれ貸倒処理反映後）。また、当期中に売掛金が 500 千円貸し倒れたが、うち 200 千円は貸倒引当金を充当し、残り 300 千円は貸倒損失として処理してある。
 - ③ 売上債権が前期と比較して 5,000 千円減少した。この減少には、円安によって外貨建売掛金の換算差額（為替差益）1,000 千円を含んでいる。
2. 次の情報をもとに、キャッシュ・フロー計算書の「有形固定資産（備品）の取得による支出」及び「有形固定資産（備品）の売却による収入」として記載される金額を答えなさい。

備品（直接法により記帳）が前期と比較して 5,000 千円減少した。当期の減価償却費は 2,000 千円、減損損失は 3,000 千円、売却による帳簿価額の減少は 4,000 千円である。この売却によって売却損が 1,000 千円生じている（売却代金は当期に受け取り済み）。また、当期に仕入れた商品（代金支払い済み）を備品に転用したことで（各自推定）千円増加している。

【解答】

- 1.① $\Delta 4,000$ 千円
 - ② $\Delta 4,000$ 千円
 - ③ 5,000 千円
-
2. 有形固定資産の取得による支出 $\Delta 2,000$ 千円
有形固定資産の売却による収入 3,000 千円

【解説】

1.①

売上債権の増減と売上債権に対する貸倒引当金の増減は相殺してキャッシュ・フロー計算書に記載します。

②

貸倒れが生じていますが、①と同様に売上債権の増減がそのまま記載されます。その理由として、次のとおり条件を追加して考えてみます。

- ✓ 当期の売上 5,500 千円（そのまま売上）→うち 500 千円が貸倒れて売上債権は 5,000 千円増加
- ✓ 当期に売掛金は一切回収していない→売上や営業債権にかかるキャッシュ・フローは 0
- ✓ 貸倒引当金繰入額 1,200 千円（200 千円充当と 1,200 千円繰入で 1,000 千円増加）

この条件のもとで、キャッシュ・フロー計算書を作ると次のようになります。

- 税引前当期純利益：4,000 千円（売上 5,500 千円－貸倒引当金繰入額 1,200 千円－貸倒損失 300 千円）
- 売上債権の増減額： $\Delta 4,000$ 千円
- 営業活動によるキャッシュ・フロー：0 千円

つまり、貸倒れの有無を考えるまでもなく、①と②は両方とも純資産の増加が 4,000 千円のみであるため、税金を考慮外とすると税引前当期純利益はそのまま 4,000 千円となります（財務諸表論の概念フレームワークのところで学習したように、純利益は純資産の増減のうち投資のリスクから解放された部分です）。そして、この 4,000 千円はキャッシュの増減ではなく売上債権の増加であるため、売上債権の増減額で同額のマイナス調整をすれば、キャッシュ・フローの金額が求められます。

③

②と同様に単純化して次のとおり条件を追加して考えます。

- ✓ 当期の売上は 0
- ✓ 売掛金の減少 5,000 千円は回収 6,000 千円（減少）と為替差益 1,000 千円（増加）

この条件のもとで、キャッシュ・フロー計算書を作ると次のようになります。

- 税引前当期純利益：1,000 千円（為替差益）
- 売上債権の増減額：5,000 千円
- 営業活動によるキャッシュ・フロー：6,000 千円

2.

備品の増減を整理すると次のとおりです。

減価償却費	△2,000 千円
減損損失	△1,000 千円
売却分	△4,000 千円
備品転用（各自推定）	<u>2,000 千円</u>
純増減	<u><u>△5,000 千円</u></u>

備品に転用した分は当期に代金を支払っているため、取得による支出となります。また、売却に関して帳簿価額 4,000 千円が減少していますが、売却損が 1,000 千円生じているため、売却による収入は 3,000 千円となります。